岡山大学教育学部研究集録　第133号（2006）75－83

大学生時代のウィリアム・ピット

岸本　広司

本稿は，有名な「ダイヤモンド・ピット」の孫で，近代イギリスを代表する政治家・雄弁家の一人であるチャタム伯ウィリアム・ピット（William Pitt, 1st Earl of Chatham,1708-78）の大学生時代を考察したものである。イートン校を卒業したピットは，オクスフォード大学とオランダのユトレヒト大学に進んだが，従来の研究はこの時期のピットをほとんど取り上げてこなかった。本稿では，ピットの思想形成を考察する一環として，18世紀のオクスフォード大学の実態に触れながら，あまり知られていない大学生時代のピットを明らかにした。

Keywords：チャタム伯ウィリアム・ピット，オクスフォード大学，ユトレヒト大学，ジェントルマン・コモナー

I

イートン校を卒業したピットは，1727年1月にオクスフォード大学のトリニティ・カレッジに入学した。同カレッジを選ぶにあたっては，おそらく義理の叔父であるスタナップ伯の影響があったのであろう。スタナップはすでに21年に物故しているが，彼はそこの出身者であった。

当時のオクスフォード大学はケンブリッジ大学とともに沈滞期にあり，入学生の数は年々減少していた[1]。また学内の規律は緩んで教育水準も低下していた[2]。ローレンス・ストーンは，1670年から1809年までのオクスフォード大学を「大衰退」(the Great Depression)と形容している[3]。ストーンによれば，この時代の「大学の歴史は，たとえ少数の学者が純然たる学問において重要な進歩をもたらしたとしても，また少数のカレッジがかなりの教育水準を維持していたとしても，実に活気のないものであった[4]」。そしてそれを裏付けるかのように，アンソニ・ウッドは，「オクスフォードは学生がいなくなってすっかり死んでしまったかのようだ[5]」と1685年の日記に書いている。アダム・スミスとエドワード・ギボンが，イギリスの大学教師の質の悪さを嘆き憤慨したことはよく知られている。「オクスフォードの大学では，このところ多年にわたって大学正教授の大部分は教えるような振りをすることさえまったく放棄している[6]」。自分のチューターは「受け取る給料についてはよく記憶しているが，果たすべき義務があることについてはすっかり忘れていた[7]」。またチェスタフィールドも，息子に宛ててこう書いた。「大学のギリシア語の教授になることについてどう思うか。それはまったくの閑職だし，ギリシア語の知識などほとんど必要としない。今お前が持っている知識で十分だと思う[8]」。ピットが入学して3年後，『オクスフォードのユーモア』(*The Humours of Oxford, A Comedy*,1730）と題する喜劇作品が出版された。その第4場で，あるフェローは次のように歌っている。

この人生で，実入りの良いフェローシップに
比すべきものがあろうか？
我々は煩わしいことに悩まされることなく，
これまでどおりのんびりと夢を見続ける。
安らぎを乱すような考えは捨て去り，
……
より気楽な人生を楽しむ。
我々は食べ，飲み，煙草を吹かし，眠る。
そして，それから，それから，
起きては，また同じことを繰り返す。[9]

こうした同時代人の証言からもわかるように，当

岡山大学教育学部社会科教育講座　700－8530　岡山市津島中3－1－1
William Pitt of College Student Days
Hiroshi KISHIMOTO
Department of Social Studies Education, Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Okayama, 700-8530

時の大学は惨憺たる状態にあった[10]。そして学生もまた，それに倣うかのように怠惰で遊びふける者が多かった。「なおも多数の貧しい家庭出身の少年たちが大学にやってきて優れた成績を収めたが，その一方で，学生生活は高価につくものとなり，ノーブルマン，ジェントルマン・コモナー，上流階層出身者が前世紀と比べて増大した。彼らは衣装の優雅さを見せびらかし，くだらない娯楽に時間を浪費した。学生の知的能力は，……1660年以降特に低下した[11]」。

ピットは，ここに挙げられているジェントルマン・コモナーとして入学した。当時の大学は学外の社会的差別を映し出し，学生にもノーブルマン（Nobleman），ジェントルマン・コモナー（Gentleman-Commoner），コモナー（Commoner），サーヴィター(Servitor)と，身分の違いがあった[12]。各身分は特別のガウンを着用することによってはっきりと区別された。大学への納付金も身分によって異なり，ランクが高いほどその金額は高かった。そのうちのノーブルマンは少数の貴族の子弟からなり，大学への納付額も年に約500ポンドであった[13]。彼らは金の飾り房の付いたビロードの縁なし帽を被り，金モールで飾られたゆったりとした絹のガウンをまとった。フェローたちとハイ・テーブルで食事することができ，シニア・コモン・ルームを利用することができた。彼らには多くの特権が与えられる一方，義務はわずかであった。そのため，放蕩に明け暮れる者もおり，彼らと知り合いになりたがる「タフト・ハンター」(tuft-hunters) もいた[14]。

ジェントルマン・コモナーは，カントリ・ジェントルマン，成功した商人，知的専門職階層の子弟などからなっていた。ノーブルマンと同じくビロードの帽子を被り（ただし，飾り房は金色ではなく黒色），ノーブルマンほど華美ではないものの，絹のガウンを着用した。彼らもディナーの際にはハイ・テーブルで食事することができ，シニア・コモン・ルームの利用などさまざまな特権が与えられていた。当時のある人物は，「ジェントルマン・コモナーは何の束縛もなく，講義や礼拝やホールでの会食に出席するよう強制されることもなかった[15]」と述べている。また，モードリン・カレッジにジェントルマン・コモナーとして入学したギボンはこう書いている。「私の虚栄心は，ジェントルマン・コモナーを平民学生から区別するビロードの帽子と絹のガウンでくすぐられた。それまで小・中学生が見たこともない多額の金が私の自由に任され，オクスフォードの商人の間で危険なまでに無制限の買い物を信用貸しですることができた。……私の住居は，モードリン・カレッジの壮麗な新築の学棟内にあり，優美で立派な家具付きの３つの部屋からなっていた[16]」。ジェントルマン・コモナーの多くは勉学そっちのけで，狩猟，釣り，飲酒，ギャンブル，喧嘩，女遊びなどにふけり，その評判はノーブルマン以上に悪かった。「我々のビロードの制帽は，すなわち自由の帽子であった[17]」とギボンは述べているが，彼らはその自由の本質ををはき違え，しばしば悪名高い不品行や放蕩に走ったのである[18]。

こうしたジェントルマン・コモナーの下に，平民身分としてのコモナーがいた。自費生で，数のうえでは最も多かった。彼らは飾り房のない帽子を被り，袖のない黒地の地味なガウンを着用した。彼らも時には喧嘩や乱痴気騒ぎを起こすことがあったが，通常は大学の規則に縛られ，チューターの厳しい監督の下に置かれた。講義や礼拝への出席は義務であった。授業料や生活費などの経費はジェントルマン・コモナーの約半額で，1714年にはジェントルマン・コモナーが年間120ポンドであったのに対して60ポンドであったと言われている[19]。彼らは概して貧しかった。親元からの送金だけでは十分にやっていくことができず，そのため町の商人や飲食店主に掛け売りしてもらって「借金するというやり方を早くから覚えた[20]」。そしてたまった借金の取り立てに苦しむことしばしばであった。

午後になるといつも，
借金取りが大学にやってくる。
学生たちは辺りをよく見回し，
警戒しながら，勇を奮って外出する。
そのようなことが何度も繰り返され，
敵とばったり出くわしてしまう。
お客様，ご存じのようにあなた様は私に借金しています。
……
あなた様はおっしゃいました，次の学期には支払うつもりだと。
私が貧乏なことはよくご存じのはず，
それなのにあなた様はまだ払ってくれません。
……
〔学生は寮へ逃げ帰る。しかし〕
借金取りは学生のドアをドンドン叩き，彼を寝させない。
そして学生から心の平穏を奪ってしまう。[21]

最も低い身分であるサーヴィターは，まったく飾りのない「悪臭放つ牛糞型の〔丸い〕帽子[22]」を被り，コモナー以上に質素な仕立ての黒地のガウンを着用した[23]。彼らは優秀であったが貧しく，給費生として食費や授業料を免除される代わりに大学

のさまざまな小使い仕事をした。またジェントルマン・コモナーたちに付き添って，彼らの世話をするのもサーヴィターの仕事であった。「私はジェントルマン・サーヴィターです。仕事はジェントルマン・コモナーに仕えて着替えを手伝い，女を取り持ち，靴を磨き，彼らの課業を行うことです。我々サーヴィターとジェントルマン・コモナーとの違いは，我々には知性はあっても金がなく，彼らには金はあっても知性がないことです[24]」。このサーヴィターから何人かの著名な人物が出ている。ちなみに，王党派のジャーナリストで王立協会の設立メンバーであったサー・ジョン・バークンヘッドはオリエル・カレッジの，大説教者として敬慕されたカルヴィン派メソジスト教会の創設者ジョージ・ホワイトフィールドは，ペンブローク・カレッジのサーヴィターであった。

II

さて，このようなヒエラルヒー社会にピットはジェントルマン・コモナーとして入学した。父親の経済事情からするならば，かなりの背伸びであったと思われる。だがそれはともかくとして，ピットはイートン校からオクスフォード大学へという典型的なエリート・コースを歩んだのである。しかし彼は孤独を感じていたと思われる。親友のジョージ・リトルトンはピットより少し前にオクスフォード大学に進んでいるが，ピットとは違ってクライスト・チャーチであった。またグレンヴィル兄弟のリチャードの方は大陸旅行に出かけ，弟のジョージの方はロンドンのインナー・テンプルの学生となった。その後ジョージはオクスフォード大学に入学しているものの，入ったのはリトルトンと同じくクライスト・チャーチであった。またチャールズ・プラットの進学先もインナー・テンプルであり，ヘンリ・フィールディングもイートン校を出てしばらく後にオランダのライデン大学へ遊学している。こうして，イートン校時代の親友はすべてピットとは違う方向に進んだ。もちろん，彼は大学で友人を作るために努力したに違いない。しかし，大学時代にイートン校時代ほどの親しい友人はできなかった。

父親ロバートは息子のために精一杯のことをした。もっとも，ピットがイートン校在学中の1726年に祖父の「ダイヤモンド・ピット」が死去し，遺産をめぐって子供たちの間で諍いが生じている。特に長男ロバートと次男トマスの争いは激しかった[25]。しかし，祖父の残した遺産は南海泡沫事件の被害等で子供たちが期待していたほど多くはなかった[26]。そのような中で，ロバートはピットに大学生活のために年間150ポンドから200ポンドの金を出した[27]。というよりも，出さざるをえなかった。彼はまず，ソールズベリ出身のジョセフ・ストックウェルという人物に息子のチューターになることを依頼した。それに対してストックウェルは，もはや誰のチューターにもならないと決めており，実際これまでも多くの依頼を断ってきたが，「ソールズベリ人」としてピット家に敬意を払わないわけにはいかないこと，また多方面からピットの人柄について聞いていることから依頼を引き受ける旨，いささか恩着せがましく返答している。そして同じ手紙で次のように書いた。

「ピット氏のために大変良い部屋を確保いたしました。それは，法学院へ進んだある大資産家が居住していた部屋で，つい先ほど退去したばかりです。完全な家具付きで，生活必需品も全部揃っています。しかし，部屋の装飾や家具の取り替えで追加費用が幾らか必要になるかもしれません。部屋代の支払い方法は，大学を去った者が〔入居時に〕払った額の3分の2を次の居住者から受け取るというものです。これによりますと，ピット氏が先ほどまで部屋を所有していた紳士に支払うべき金額は43ポンドということになります。[28]」。

だが，ストックウェルがジェントルマン・コモナーとして学生生活を送るうえに必要とした経費は，もちろん部屋代だけではなかった。彼はさらに次のように続ける。

「若い紳士は，部屋で友人をもてなすときのために，何枚かのテーブル掛けと何点かの金銀食器類を持っているのが普通です。ただし，共同で公のために使用されるものは大学で備えます。／……名家の紳士に付き添って奉仕するのは，現在では〔サーヴィターよりも〕従僕（footman）が一般的で，またそれが名誉なことと考えられています。ピット氏の入学費用としては，以上の他に次のようなものがあります。

保証金（返還されます）	10ポンド
大学への寄付金	10ポンド
フェロー・コモン・ルームへの入室料	2ポンド
大学の食器等の使用料	2ポンド
大学の召使いへの謝金	1ポンド15シリング
入学手数料	16シリング

ピット氏の寄付金10ポンドと言いましたが，そのわけは，私どもがすべてのジェントルマン・コモナーと大変多くのコモナーに要求し，またいただいているものだからです。それに加えて，ピット氏と同じガウンを着用する何人かの若い紳士

が，10ポンドないし12ポンドの金銀食器１点を大学に寄贈したということを申し上げてもお許しいただけると思います。もし100ポンドの小切手をお送り願えれば，ピット氏のこちらでの生活費はそれですべて賄えるでしょうし，私もその使い道を記した詳細な勘定書をお送りする光栄に浴したく存じます。[29]」

この100ポンドには，数日後のストックウェルの手紙にも追加説明されているように，「ガウン，キャップ・バンド，お茶の調度品，それに若き紳士にとって不可欠な持ち物である他の幾つかの装飾品と身の回り品[30]」の代金も含まれていた。しかし100ポンドと言えば，17世紀末に上層の自作農（７人家族）の年収が84ポンド，下級官吏（６人家族）が120ポンド[31]，19世紀に入っても，非国教徒聖職者（４人家族）と宿屋の主人（５人家族）がちょうど100ポンドである[32]。いまだ20歳にもならない学生１人当たりの経費である。ジェントルマン・コモナーが，いかに大金を費消する身分であったかがこの数字からもよくわかる。

ストックウェルの手紙を読んだロバートは，さすがにその額の大きさに怯んだ。しかし彼はストックウェルのアドバイスに従うことにした。年が明けた1727年１月に入学したピットは，程なくして父親に手紙を書いた。そこには，ピットが実際に支出した項目と金額が記されている。それによると，支出したのは入学手数料，保証金，寄付金，召使いへの報酬，ガウン代，帽子代，ティーテーブル代，ティースプーン代，陶器代，部屋代，家具代など，総計84ポンド14シリング８ペンスで，残高は15ポンド５シリング４ペンスであった。そしてこの勘定書に続けて次のように書いた。「私は，お父さんがこうした項目の幾つかを過度の無駄遣いであると思うのではないかと大変心配しています。しかし私の申し上げたいことは，それは私の浪費ではなく，この大学のしきたりだとお考えいただきたいということです。こちらでは，私たちは大抵のものに大変高額な代金を支払っているのです[33]」。

しかしピットの弁明にもかかわらず，父親は浪費を疑ったようである。それは特に，３ヵ月分の支出の明細を記した４月10日付のピットからの手紙を読んでからである。そこには，学寮費15ポンド，フランス語の勉学費２ポンド２シリング，実験哲学の講義費用２ポンド２シリング，書店への支払い代金５ポンドの他に，上着と半ズボン代５ポンド18シリング，ひだ飾り用のキャンブリック代１ポンド４シリング，靴とストッキング代１ポンド19シリング，蝋燭・石炭・薪代３ポンド10シリング，小遣い・手袋・粉おしろい・お茶代４ポンド４シリング，洗濯代２ポンド２シリングなど，総額47ポンド５シリングの支出の明細が書かれていたのである[34]。ロバートからするならば，あまりにも多い支出である。またそれらには，彼がこれまで予想もしていなかった項目も含まれている。悪評高いジェントルマン・コモナーのことである。遊びほうけているのではないかと疑ったとしても無理はなかろう。とりわけ父親が目にとめたのは洗濯代であった。一学生でなぜこれほどの洗濯代がかかるのか。彼は直ちにそのことを尋ねた。次に引用するのは，それに対するピットの返信である。

「25日付の手紙を受け取りました。その中でお父さんは，極度に憂慮しながら私の出費に不満を述べておられます。この場合，あえて自分を正当化したり自己弁護したりすれば，きっと馬鹿なやつだとお思いになることでしょう。……しかし，一，二の項目を取り上げて説明することをお許しいただくならば，おそらくそれらをとっぴなものとも度を超したものともお考えにならないかもしれません。……洗濯代は２ポンド１シリング[35]。１週につき約３シリング６ペンスです。そのうちワイシャツが１枚４ペンス，半ダースで週２シリング，靴とストッキングが19シリングです。靴は３足持っていますが，１足につき５シリング，ストッキングは２足あり，１足は絹製，後の１足はウーステッド製です。以上でこの項目のすべてです。しかし，お父さんは私の出費が大きすぎるとお考えになっていますから，私は将来のためにそれを減らすよう努めなければなりません。またお父さんが認めてくださるものならば，私はどのようなものにも満足するつもりです。考慮しなければならない項目は召使いです。そのために要する費用を多くの人は節約しません。しかし私はその出費を，もしお父さんが妥当とお考えになるならば，贅沢など何も望んでいないことを信じていただくために喜んで切り詰めたいと思います。[36]」

III

この手紙が書かれて３週間後の1727年５月20日，ピットに突然不幸が襲った。父親ロバートが，痛風と結石病のために47歳の若さで急死したのである。ピット家にとっては不幸続きであった。前年の26年１月には，母方の祖母グランディソン子爵夫人が死亡している。それから５ヵ月後には，彼女の再婚相手で，ピットの名付け親であるウィリアム・ステュアートが妻の後を追うように亡くなっている。そしてその少し前の４月28日には，先に述べたよう

に，ピットをかわいがっていた祖父「ダイヤモンド・ピット」が他界しているのである。不幸はさらに続いた。ピットの祖母で，「ダイヤモンド・ピット」の妻のジェーンが27年の1月に亡くなり，それから程なくして，ピットの父親ロバートも死去したのである。わずか2年間で5人もの近親者の死である。こうした不幸を記したピットの手紙や日記は残っていない。しかし，それが彼の後の人生に直接・間接に影響を及ぼしたことは間違いない。特に，父親の死の影響は直ちに現れた。ピットは大学での勉学を放棄せざるをえなくなったのである。

父親はピットにほとんど遺産を残さなかった。当時の慣行である長子相続制に従って，彼の土地財産はすべて長男トマスに譲られた。次男のピットに与えられたのは，年約100ポンドの地代収入だけであり[37]，上流階層の中で一定の生活水準を維持するにはまったく不十分であった。ピットがいつオクスフォード大学を去ったのかは定かでない。しかし学位を取得することなく，わずか1年あまりで学業を放棄したのは，明らかに父の死による経済的理由のためであった。これ以降，彼は絶えず金銭的に苦しめられることになる。もっとも，大学を去ったいま1つの理由としては，健康上の問題もあったのかもしれない。ピットは早くから痛風を患っていた。イートン校時代は，病弱のために他の子供のように快活に遊び回ることができなかった。オクスフォードの気候や生活も，彼の身体には適していなかったのかもしれない[38]。経済事情とともに，健康問題も生涯をとおして彼を苦しめる要因となる。

1年あまりしか在籍しなかったオクスフォード大学で，ピットがどのような学生生活を送り，どのような勉学をどの程度行ったのかを資料に基づいてはっきりと言うことはできない。しかしそれから27年後，兄の息子で，後にカムルフォード男爵となるトマス・ピットがケンブリッジ大学に入学した際，在学中に読むべき書物を列挙して勉学に勤しむよう励ましの手紙を出している。そこに挙げられた書物は，ピットがオクスフォード大学時代に読んだものなのかもしれない。あるいはたとえそうでなくとも，その後のピットがそれらを読んで感銘を受けたことは疑いなく，彼の思想形成を知るうえに興味深いものがある。可能なかぎり引用しておこう。

「ケンブリッジからのあなたの便りは，私を大変楽しい気分にしてくれました。……学問の効用は，人間を単に博識にするだけではなく，賢明で有徳にするところにあります。＜汝の徳に栄えあれ＞(*Macte tua virtute*)。かわいい甥よ，この黄金律に従って行動しなさい。そうすれば，あなたは欲するとおりのあなたに，また私が心から望むあなたに必ずやなることができます。

1つだけ危険なことがあります。あなたの年齢ではおそらく無理もありませんが，それは快楽にふけることです。……もし読書に時間を割かず，それにまったく慣れようとしないならば，あなたの大事な日々があなたの手からするりと滑り落ち，軽薄かつ無駄に過ごされることになるでしょう。そしてあなたが喜んでもらいたいと願っている人々から褒められることもないでしょうし，実際のところあなた自身楽しいこともないでしょう。……学習課程に関して言えば，以前私が指摘した書物を，そしてそれらのみを読んでほしいと思います。それらは次のもの，すなわち，ユークリッド，論理学，実験哲学，ロックの『知性論』『統治論』『寛容についての書簡』です。今のところ，詩人の作品は求めません。ただし，ホラティウスとヴェルギリウスは別です。ホラティウスについては『頌詩』，とりわけ『書簡詩』と『詩論』です。これらの作品を＜昼夜ひもとけ＞(*nocturna versate manu,versate diurna*)。キケロの『義務論』『友情論』『老年論』。彼の『カティリナ弾劾演説』と『ピリッピカ』。サルスティウス。暇なときには，歴史の年代と歴史上の主要な出来事，および王位継承をしっかりと頭に入れるためにイングランドの略史を通読すべきです。我が憲法の真の原理を論じたイギリス史の良書については後ほど示されるでしょう。バーネット自身が縮約した『宗教改革史』は，細心の注意を払って読まれるべきです。パオロ・サルピ神父の英訳版『聖職禄問題』。フランスの大家であるモリエールの戯曲。『スペクテイター』とりわけアディソン氏の新聞は，細切れの時間しかないときに自室で頻繁に読むべきです。[39]」

他の手紙では，これら以外にも読むべき書物が挙げられている。例えば，ホメロスの『イリアス』，ボリングブルックの『イングランド史論』(*Remarks on the History of England*,1730-31)，ナサニエル・ベーコンの『イングランドの法と統治についての歴史的・政治的論考』(*An Historical and Political Discourse of the Laws and Government of England*,1647-51)，クラレンドン伯爵の『イングランド内乱史』(*The History of the Rebellion and Civil Wars in England*,1702-4)，トマス・メーの『長期議会史』(*History of the Long Parliament*,1647)，ギルバート・バーネットの『同時代史』(*History of His Own Times*,1724-34) 等々である[40]。ピットは，これらの文学書や歴史書にはさまざまな教訓が盛ら

れていると考えた。例えばホメロスとヴェルギリウスの作品は，「あなたの年頃に吸収すべき最も立派な教訓，すなわち，名誉，勇気，公平無私，真理への愛，気まぐれな感情の抑制，振る舞いの優雅さ，慈愛など，要するに真の意味での美徳が含まれています[41]」。古典にはさまざまな読み方があるとしても，ピットは他の多くの同時代人と同様に道徳を重視し，その観点から読むことを勧めていたのである。

哲学では，ジョン・ロックの作品が推奨されていることに注目しておく必要があろう。ピットは，社会の慣習や偏見を盲目的に受け入れ，自己判断できず個が自立していない前近代的な人間に批判的であった。こうしたピットが，新しい近代的人間像を鮮明にしたロックに惹かれたのもうなずける。ちなみに彼は，甥のトマスがロックを読んで，「もし正しく振る舞おうとするならば，他人の理性ではなく，自らの理性こそを行使しなければならない」と考えるに至ったことを喜んでいる。そしてそうした「戒めは，理性的存在たる人間の威厳にとって真に価値あるものだ[42]」と述べている。おそらくピットは，ロックの著作の中に，新しい時代を担う新しい人間像を見てとっていたのであろう。もちろん，彼がロックを推奨したのはそうした理由からだけではない。ピットにとってロックは，何よりも名誉革命を正当化した政治哲学者であった。ピットの名誉革命観やウィッグ主義については稿を改めて論じるとして，名誉革命体制の熱心な擁護者でありウィッグ原理の信奉者であったピットからするならば，ロックはまさしく自己の政治理念の理論的支えに他ならなかったのである。

文学や哲学や歴史のみならず，宗教も学ぶよう勧めていることにも注目しておく必要があろう。ピットの信仰についてはここでは触れないが，彼がごく一般的なキリスト教徒であり国教徒であったことは，甥に宛てた次の手紙からも窺い知ることができる。

「これから私はあなたに１つの忠告をしますが，それはあなたの幸福ときわめて密接に関わっています。また，あなたの人生の立派な名誉ある目的が達成できるかどうかも，ひとえにそれにかかっています。私が言わんとしているのは，あなたの心の中に真の宗教的感情を涵養してもらいたいということです。もし神に対して正しくなければ，人間に対しても決して正しくはありえません。……『青年のときこそ造物主を思い起こせ』は，重要かつ最も深遠な知恵です。『主を畏れることは知恵の始めである』。……

宗教心をしっかりと持ちなさい。あなたは最大の危機に陥ったとき，つまり人生の大嵐のときに宗教をしばしば求めることでしょう。あなたが迷信と熱狂を嫌悪し軽蔑するのと同じだけ，真の宗教を大切に育みなさい。真の宗教は人間性の完成であり，かつその栄光です。他方，迷信と熱狂は人間性を奪い，それを汚すものです。宗教の本質とは，神と人間に対する罪なき心のことだということをよく覚えておきなさい。[43]」

ここで言われている「迷信と熱狂」が，カトリックと非国教系プロテスタントを意味していることは明らかである。そしてピットが，それらの中庸としての国教会を「真の宗教」と見なしていることも明白である。彼はイギリス国教会を信奉していた。そしてこの点でも，名誉革命後の体制をほぼ無条件に受け入れていたのである。

ピットが文学に関心を持っていたことはこれまで見てきたところからも明らかであるが，オクスフォード大学時代のピットは，詩に興味を抱いていたようである。ジョージ１世が逝去した1727年には，亡き王を称える六歩格の詩をラテン語で創作している。彼はその詩を大学のコンテストに応募した。しかし賞をとることはできなかった。トマス・Ｂ・マコーリによれば，詩の価値は低かった[44]。別稿で明らかにするように，ピットは多分に演劇的で，常に他人の目を意識しつつ大向こうを唸らせる役者タイプの政治家であった。その点では，彼には詩的センスがあったと言いうるかもしれない。だがこのとき受賞したのは３学年上のクライスト・チャーチの学生で，後にピットの政敵となるマンスフィールド伯ウィリアム・マーリであった[45]。にもかかわらず，我々はこの逸話からもピットの文学趣味，とりわけ英雄叙事詩を好む傾向があったことを知ることができよう。

Ⅳ

さて，オクスフォード大学を去ったピットは，学業を継続するために1728年にオランダのユトレヒト大学に入学した。ユトレヒト市はスペイン継承戦争の和平交渉の舞台で，1713年に平和条約が結ばれた所として有名である。同市にあるユトレヒト大学（1636年創立）は，法学の研究水準の高さでその名が知られ，イングランドやスコットランドから多くの学生が留学していた。経済的理由からオクスフォード大学を中退したピットが，なぜユトレヒト大学へ行こうとしたのか，またその大学へいつ入学し，いつまで在学したのかは不明である。さらに，そこでどのような勉強をしたのかも定かでない。ただ，兄トマスの援助を受けて学業を続けたことは間違いない。トマスは，27年の総選挙でデヴォン州

のオークハンプトン選挙区から下院議員に選出されたばかりであった[46]。その彼が，いわば父親代わりとしてピットの面倒を見たのである。次に引用するのは，兄への感謝を綴ったピットの母親宛書簡である。

「私は，お母さんが仕送りについて兄に問い合わせをしてくださったことを感謝せずにはおれません。兄から世界で最も優しい手紙を受け取りました。そのことをお母さんにお伝えして，お母さんに安心してもらわなかったとすれば，私は兄に対して正しくないと思います。その手紙の中で兄は，私が向上するために絶対必要と思われる所へ行くよう勧めてくれました。そして私の利益と教育のために，財産を与えてくれることを請け合ってくれました。[47]」

ユトレヒト大学では，ヴィラーズ卿やバカン卿と親しく交わったようである。前者は母方の従兄弟であり，後者は1783年のフォックス＝ノース連立内閣のときにスコットランド法務長官となったヘンリ・アースキンの，また1806年のグレンヴィル内閣のときに大法官となったトマス・アースキンの父親である。バカン卿については，「ユトレヒトで共に学生であったとき以来の親しい友人[48]」とピット自身が後に述べている。しかし，既述のように，ユトレヒト大学時代のピットについてはほとんどわかっていない。その間の手紙も，母親に宛てた4通が残っているにすぎないのである[49]。だがユトレヒトでの生活は，ピットにとって大きな意味を持ったと思われる。ウォルポール政権下にあったこの時代のイギリスには，ともすると島国特有の狭量さや閉鎖的雰囲気が漂っていた。それに対してオランダは，海運の発達や度重なる戦争の影響もあってかコスモポリタン的であった。ピットはオランダの自由で開放的な空気を気に入っていたようである。彼は母親宛に，保守的傾向の強いオクスフォード大学にとどまっているリトルトンを哀れんでこう書いている。「彼をオランダへ寄こしてください。この共和国で生活すれば，彼の心におそらく自由への愛が芽生えてくることでしょうし，彼を束縛しているものに軽蔑の目を向けさせることにもなるでしょう[50]」。ピットにとってユトレヒト大学での生活は，オクスフォードのときよりもはるかに楽しいものであった。そしてたとえ短い期間であったとしても，海外で生活したことは彼にとっては有意義であった。とりわけ祖国をより広い世界から眺めることのできる場所に身を置いたことは，やがて大英帝国の建設という大事業に乗り出すうえでの貴重な経験になったと考えられるのである。ピットはこれ以降公的世界に入っていく。政治家として出立するのは，ユトレヒト大学を去って数年後のことである。

付記：本稿は，「ウィリアム・ピット研究（II）」（『山梨大学教育人間科学部紀要』第2巻2号，2001年）の第3節「オクスフォード大学とユトレヒト大学時代」を全面的に書き改め，内容を一新させたものである。

注

(1) オクスフォード大学の年間の入学者数は，1660年代には460名いたのに対して，1690年代は310名，1750年代になると200名にまで減少している。その後，徐々に回復し，世紀の変わり目頃は平均250名であった。Lawrence Stone, "The Size and Composition of the Oxford Student Body 1580-1910," in *The University in Society*, ed.Lawrence Stone, 2 vols.(Princeton:Princeton University Press,1974), I, pp.6, 37, 91 ; Vivian H.H.Green, "The University and Social Life," in *The History of the University of Oxford*, vol.V : *The Eighteenth Century*, ed.L.S.Sutherland and L.G.Mitchell (Oxford:Clarendon Press,1986), p.309.

(2) Vivian H.H.Green, *The Universities* (Harmondsworth : Penguin Books, 1969), pp.40-53.（安原義仁・成定薫訳『イギリスの大学—その歴史と生態』法政大学出版局，1994年，38-55頁）; idem, *A History of Oxford University* (London:B.T.Batsford,1974), pp.85-120.

(3) Stone, "The Size and Composition of the Oxford Student Body 1580-1910," p.37.

(4) *Ibid.*,p.5.

(5) *The Life and Times of Anthony Wood, Antiquary, of Oxford,1632-1695, Described by Himself, Collected from His Diaries and other Papers*, ed.Andrew Clark and Llewelyn Powys, 5 vols.(Oxford:Clarendon Press,1891-1900), III, p.163.

(6) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed.Edwin Cannan (New York:The Modern Library,1937), p.718.（水田洋訳『国富論（下）』〈世界の大思想15〉河出書房新社，1965年，185頁。）

(7) Edward Gibbon, *Memoirs of My Life and Writings*, in *The Miscellaneous Works of Edward Gibbon*, ed.Lord Sheffield, 5 vols.(1814;rpt. New York:AMS Press,1971), I, p.58.（中野好之訳『ギボン自伝』筑摩書房，1994年，62頁。）

(8) Lord Chesterfield to his Son (15 Jan.1748), *Letters*

Written by the Late Right Honourable Philip Dormer Stanhope, Earl of Chesterfield, to his Son, Philip Stanhope, ... Published by Mrs.Eugenia Stanhope, 3rd edn.,4 vols.(London:Printed for J.Dodsley,1774), I, p.307.

(9) James Miller, *The Humours of Oxford. A Comedy. As it is acted at the Theatre-Royal, in Drury-Lane, by His Majesty's Servants. By a Gentleman of Wadham-College* (Dublin:Printed by S.Powell, for George Risk et al.,1730), Epilogue, A Song sung by Mr.Harper in the Fourth Act. 訳詩にあたっては，グリーン／安原・成定訳『イギリスの大学』48頁を参照させていただいた。なお，*Advice to the Universities of Oxford and Cambridge* (London:Printed for G.Kearsley,1783), p.26にも，同様の表現を見ることができる。「フェローの唯一の仕事は，食べて，飲んで，眠ることである。それが彼の唯一の関心事であり，怠惰な時間を満たす手段である」。

(10) 「オクスフォードとケンブリッジが，その長い歴史の中でも最も凡庸な時期に入ろうとしていたのは明らかであった。それはおそらく，両大学の国民生活に対する影響力が最低線にまで下がった時期であった。……学生数は激減した。国教会の独占の下で，両大学は18世紀を通じて惰眠を貪った。……聴講学生数も年俸の額も信じられないほどわずかだったので，教授の多くは講義することをまったくやめていた。オクスフォードのシラバスは依然として時代遅れのスコラ主義によって支配されていた。……／……良心的なチューター，優れた学者，教養があり博識な大学人も何人かはいた。しかし一般的には，18世紀の両大学における学問は干からびた精彩のないもので，衒学的なものであった」(Green, *The Universities*, pp.44-45.邦訳, 43-45頁)。もっとも最近では，「18世紀のオクスフォードは，批評家が言うような瀕死の状態にある施設ではなかった」という指摘もある。L.G.Mitchell, "Introduction," in *The History of the University of Oxford*, V, ed.Sutherland & Mitchell, p.7.

(11) Green, *The Universities*, pp.45-46.（邦訳, 45頁。）

(12) Graham Midgley, *University Life in Eighteenth-Century Oxford* (New Haven:Yale University Press,1996), pp.1-15.

(13) Green, "The University and Social Life," p.317.

(14) このタフト・ハンターは，しばしば諷刺や批判の対象となった。例えば，Nicholas Amhurst, *Strephon's Revenge : A Satire on the Oxford Toasts. Inscrib'd to the Author of Merton Walks* (London:Printed for R.Francklin,1718); *The Loiterer, a Periodical Work* ([Oxford]:Printed for the Author and sold by Messrs.Prince and Cooke et al.,1790), No.11 ; *The Student, or, the Oxford, and Cambridge Monthly Miscellany*, 2 vols.(Oxford:Printed for J.Newbery,1750-51), II, pp.104-10.

(15) *Diaries and Correspondence of James Harris, First Earl of Malmesbury : Containing an Account of his Missions to the Courts of Madrid, Frederick the Great, Catherine the Second, and the Hague and his Special Missions to Berlin, Brunswick, and the French Republic*, ed.his Grandson, the Third Earl of Malmesbury, 4 vols.(London:Richard Bentley,1844), I, p.ix.

(16) Gibbon, *Memoirs*, in *Miscellaneous Works*, I, p.45.（邦訳, 52頁。）

(17) *Ibid.*,p.54.（邦訳, 59頁。）

(18) Green, "The University and Social Life," pp.318-21.

Points to the *Velvet Cap*, whose Power
Exempts from Care the frolic Hour—
There gives, as TRIUMPH lights her Face,
The *Silken Gown* its *Fringed Grace*,
And bids it rustle in the Breeze
A Sanction to the *Sons of Ease!*
Such, whom the MUSES blush to name,
Let such still glory in their Shame—
Affert (when PLUTUS proves no Friend)
Their happy Priviledge to spend.
And still, with supercilious Air,
The *tufted Cap of FOLLY* wear.

(*The Follies of Oxford : Or Cursory Sketches on a University Education, from an under Graduate, to his Friend in the Country* [London:Printed for Dodsley, 1785], p.9.)

(19) Charles E.Mallet, *A History of the University of Oxford*, 3 vols.(1924-27;rpt. New York:Barnes & Noble,1968), III, p.65, n.2 ; Green, "The University and Social Life," p.328.

(20) *Memoirs of an Oxford Scholar. Containing, his Amour with the Beautiful Miss L-, of Essex ; And Interspers'd with Several Entertaining Incidents* (London:Printed and sold by W.Reeve,1756), p.40.

(21) Alicia Danvers, *Academia : Or, the Humours of the University of Oxford. In Burlesque Verse*

(London:Printed for J.Morphew,1716), pp.36, 39.

(22) *The Servitour : A Poem. Written by a Servitour of the University of Oxford, and Faithfully taken from his Own Original Copy, &c.*(London:Printed and sold by H.Hills,1709), p.6.

(23) 「私の衣服はみすぼらしかった。……毛糸の手袋をし，継ぎを当てたガウンを羽織り，汚れた靴を履いていた」。George Whitefield, *A Short Account of God's Dealings with the Reverend Mr.George Whitefield, ... from his Infancy, to the Time of his Entring into Holy Orders....* (London:Printed by W.Strahan,1740), p.39.

(24) Thomas Baker, *An Act at Oxford. A Comedy. By the Author of The Yeoman o'Kent* (London:Printed for Bernard Lintott, 1704), p.10.

(25) Brian Tunstall, *William Pitt : Earl of Chatham* (London:Hodder & Stoughton,1938), pp.23-24.

(26) *Ibid.*,p.23.

(27) *Ibid.*, p.24 ; Albert von Ruville, *William Pitt, Earl of Chatham*, trans.H.J.Chaytor, 3 vols. (London:William Heinemann, 1907), I, p.80.

(28) Joseph Stockwell to Robert Pitt (c.Dec.1726), Lord Rosebery, *Chatham : His Early Life and Connections* (London:Arthur L.Humphreys,1910), p.32.

(29) *Ibid.*,pp.32-33.

(30) Joseph Stockwell to Robert Pitt (22 Dec.1726), *ibid.*,pp.33-34.

(31) Gregory King, *Natural and Political Observations and Conclusions upon the State and Condition of England*, in *Two Tracts*, ed.George E.Barnett (Baltimore : The Johns Hopkins Press, 1936), p.31.

(32) Patrick Colquhoun, *A Treatise on the Wealth, Power, and Resources, of the British Empire, in Every Quarter of the World, Including the East Indies : The Rise and Progress of the Funding System Explained*, 2nd edn.(London:Printed for J.Mawman,1815), pp.124-25.

(33) William Pitt to Robert Pitt (20 Jan.1727), Rosebery, *Chatham*, pp.34-35.なお，ピット以外の学生もかなりの額の出費をしていたようで，次の詩からもそのことを窺い知ることができる。

For *Gown*, and *Cap*, for *Drink*, and *Smoke*,
And so much more for *Ink*, and *Chalk* ;
Five Pounds a *Coat*—*Ink* Five more—Ten,
Six Bottles—*Chalk* as much again;
A *Glass* broke, *Sixpence*—So much more,
Because 'twas put upon the *Score*.
And at this rate the *Coxcombs* run
Their *Daddies* out of *House* and *Home*.
(Danvers, *Academia*, pp.24-25.)

(34) William Pitt to Robert Pitt (10 April 1727), Rosebery, *Chatham*, p.37.

(35) 4月10日付の手紙では，2ポンド2シリングと記されている。

(36) William Pitt to Robert Pitt (29 April 1727), Rosebery, *Chatham*, pp.35-36.

(37) Basil Williams, *The Life of William Pitt, Earl of Chatham*, 2 vols.(London:Longmans,Green & Co.,1913), I, p.39.

(38) ただし，Owen Sherrard, *Lord Chatham : A War Minister in the Making* (London:The Bodley Head,1952), p.21は，このことを大学を去った理由とは考えていない。

(39) William Pitt to Thomas Pitt (12 Jan.1754), *Correspondence of William Pitt, Earl of Chatham*, ed.W.S.Taylor and J.H.Pringle, 4 vols.(London:John Murray,1838-40), I, pp.64-68.

(40) William Pitt to Thomas Pitt (12 Oct.1751), *ibid.*,p.62 ;(4 May 1754), pp.108-109 ;(5 Sept.1754), pp.113-15.

(41) William Pitt to Thomas Pitt (12 Oct.1751), *ibid.*,pp.62-63.

(42) William Pitt to Thomas Pitt (3 Feb.1754), *ibid.*,pp.82-83.

(43) William Pitt to Thomas Pitt (14 Jan.1754), *ibid.*,pp.73-75.

(44) Thomas B.Macaulay, *Two Essays on William Pitt, Earl of Chatham*, ed.Arthur D.Innes (Cambridge:University Press,1900), pp.5-6.

(45) Williams, *The Life of William Pitt*, I, p.38 ; Peter Brown, *William Pitt, Earl of Chatham : The Great Commoner* (London:George Allen & Unwin,1978), p.29.

(46) Romney Sedgwick (ed.), *The History of Parliament : The House of Commons,1715-1754*, 2 vols. (London:HMSO,1970), II, p.353.

(47) William Pitt to his Mother (8 April 1728), Rosebery, *Chatham*, p.42.

(48) Chatham to the Earl of Shelburne (12 Oct.1766), *Chatham Corr.*,III, p.105.

(49) William Pitt to his Mother (6 Feb.1728), Rosebery, *Chatham*, p.40 ;(13 Feb.1728), pp.40-41 ; (29 Feb.1728), pp.41-42 ;(8 April 1728), pp.42-43.

(50) William Pitt to his Mother (29 Feb.1728), *ibid.*,p.42.